



第38回 日産 童話と絵本のグランプリ

# 1が2 2が4 4が8 コウタリ リン

三年生になって初めての体験学習で、ハルタが水族館に行った日だった。家に帰ってくると、となりに住む杉田のお婆さんがいた。

「じいちゃんが、ついさつき病院に運ばれたの、早く行ってあげて！」

かけつけたハルタと母さんがどんなに呼んでも、じいちゃんは目をさまさなかつた。

(ひどいや、じいちゃん。おれが水族館のつかい水その前にいるときに、ひとりでいなくなるなんて。バイバイくらい言いに来てくれよ、じいちゃん！)

お葬式の終わった夜、ねむれないハルタは、げんこつでまくらをポスポスなぐりつけていた。すると遠くから水の中みたいなの、くぐもった声が聞こえてきた。

「めんめんめんめん 五個のめん で ごめん」

「じいちゃん？」  
ハルタはがばつと起きあがる。部屋のすみっこに、じいちゃんが座っていた。「じいちゃん！」

抱きつこうとしたハルタは、じいちゃんをつきぬけて壁にぶつかった。「痛つてえ……」

「ハルタ だいじょうぶかい？ 今のじいちゃんの体は 見えてるだけなんだよ」

じいちゃんは、うつすら透けていた。「急に いなくなつて 悪かつたなあ…… 苦しかつた？ 死ぬとき」

「うーん そうでもなかつたよ 今、苦しくない？」

「だいじょうぶさ ほれ もう寝よう ハルタは、じいちゃんとならんでふとんに入った。(じいちゃん) —— なんだい？ (じいちゃん) —— ここにいるよ……」

じいちゃんの声を聞きながら、ハルタは眠りにとけてゆく。

じいちゃんの家に来たのは、ハルタが三歳のときだ。母さんの仕事がなく なつて、ひとり暮らしとふたり暮らしが合体した。ハルタと母さんの顔を見るなりじいちゃんは言った。「さあ、まずはメシを食べるぞ。ポ」

ナスでたから、マーボーナス」

ハルタは、じいちゃんといるとほつとして、元気が出ていっぱい笑えるようになった。

お葬式の夜に出てきたきり、三週間以上過ぎたけれど、じいちゃんはあられもない。母さんはいままでよりいそがしくなつて、いつもいらいらしている。じいちゃんが会いに来たことも、言えないままで。

その日は朝から最悪だった。体操服を忘れて取りにもどつたら遅刻した。休み時間、六年生に「のけ」とボールをぶつけられた。給食のおかわりジャンケンで、あと出だと言われてケンカになつた。放課後は青山先生から職員室によべられた。たいへんなことはないかと聞かれたけれど「ぜんぜんないじょうぶ、あははー」と笑つておいた。

教室にもどつて、ケンスケと遊ぼうと思つていたのに、なにも言わないで帰つてしまつていた。家に着いたらお菓子もジュースもない。ぬるい水道の水を飲む。

部屋中見回しても、じいちゃんは出てこなかつた。ごろんと寝ころがつて、天井ようを見上げる。まぶたが重くなる。

がらがらと玄関の開く音がして、寝ていたハルタは目を覚ました。もう夜遅い時間だ。

つかれた顔で部屋に入ってきた母さんの携帯電話が、ピロピロ鳴り出した。「はい……いえ、はい、すぐもどります」

母さんはテーブルにお金をおいた。「コンビニで何か、買って食べておいて」

それだけ言つて、自転車でもた仕事に行つてしまつた。

ハルタはポケットにお金をねじこんで、くらの道を歩いた。こんな時間にひとり外を歩くなんて初めてだ。やつと着いたコンビニは、目が痛くなるほど明るくて、お客さんたちはハルタなんか見えていないみたいにお金を物している。

(おれ、いない人みたいだ……) なのにも買わずにコンビニを飛び出した。「きみ、ちよつといいかな？」

家の前で声をかけられた。知らない男の人の声だ。ハルタはこわごわふりかえる。

制服姿のおまわりさんだった。うしろには、パトカーがとまつている。胸がドキドキする。

「夜、ひとりでよく出かけるの？」

(ああ、おこられるんだ)

そのとき、ひよいと心配そうな顔が見えた。となりの杉田のお婆さんだ。そのうしろから背の高い影が近づいてくる。

「松本ハルタクんの担任の青山ですが」そこにやつてきた車から、ケンスケが飛び出してくる。ケンスケのおかあさんも車から降りて青山先生に話しかけている。

キキーツと自転車のブレーキの音。髪の毛をふりみだした母さん。

「ハルタ！ なにがあつたの？」

おまわりさんが母さんに話をする。「パトロール中にひとりで歩く男の子を見かけたので。でも、こんなに見守ってくれる人がいるなら、だいじょうぶでしょう」

パトカーが静かに去って行く。母さんはその場にへたりこんだ。立ち上がるのに手を貸しながら、杉田のおばさんは言った。  
「なんだか突然（おとなりさんの、人となり）ってダジャレが浮かんでね、それで松本さんのところ行かなきゃって思ったの」  
「私も、今日（ハルタの笑顔は、はるタイプ）とひらめいて最近の笑顔は作り笑いだっただか、と心配になつて」と、青山先生。  
ケンスケが茶色い紙袋をさし出した。

「ぼくの特製クッキー。今日持って行くって黒板に書いておいたけど、見た？」  
「黒板？ ぜんぜん気がつかなかった」  
「おそくなつたけど（クッキーは楽しいクッキー）って言つてたハルタのじいちゃん思い出して、がんばつたよ」  
「じいちゃんだ」とハルタはつぶやいた。  
じいちゃんが、いろんな人にSOSを出してくれたんだ。

「母さんも、じいちゃんが見えた？」  
「ハルタも見えるの？ じいちゃんはいったい、なにしてるの？ この音楽はなに？」  
「マンボだよ。じいちゃんはマンボウの上でマンボをおどってるんだよ」  
ふふつと母さんがふき出す。  
「マンボウでマンボ？ やつぱりダジャレなの、じいちゃんつたら」  
ハルタもじいちゃんをまねて、マンボをおどりはじめる。右足を前に一歩だしてもどす。左足をうしろへ一歩引いてもどす。  
「ほら、母さんも」  
泣き笑いでステップをふむ親子を、まわりの人たちが不思議そうに見ていた。  
マンボウが体をひるがえし、じいちゃんをつけたまま水そうの奥へと泳ぎはじめた。  
「じいちゃんー」  
のぼした手が、水そうのガラスにぶつかると。あつちとこつち。このへだたりを越えることはできない。だんだん音楽が小さくなる。マンボウの上でお

四十九日の法要の前の夜、じいちゃんがあらわれた。  
「法要のあと 水族館に行つてくれんか」  
「どうして？」  
「マンボをおどるから 見ておくれ」  
「見てのお楽しみ」  
じいちゃんがニンマリ笑う。  
亡くなった人は、四十九日たつたらあの世へ旅立つんだと母さんは言っていた。  
「四十九日が終わつたら、もう会えない？」  
「そうだな そういう決まりらしいやつぱり。ハルタの体から力がぬける。」

「ハルタ じいちゃんがいなくてもだいじょうぶだと 今はまだ思えないかもしれない でも これからきつと だいじょうぶになると 思うことはできるだろう？」  
じいちゃんを見た。体の色がうすくなっている。ハルタはおなかに力を入

どるじいちゃんが、ぼやける。  
「1が2 2が4 4が8 倍倍バライ」  
大きく手をふつて、笑つておどりがらじいちゃんはうすくなって、水にとけるように消えた。ちゃんと、あの世へ行ったのだ。  
長い時間、水そうの前に立っていた。母さんがハルタの涙のあとを手のひらでぬぐう。  
「ねえ……おなかすかない？」  
「うん。あれ食べたいな。ボーンヌステから」  
「マーボーンヌス！」  
ふたりの声がそろつて、また笑つた。  
（じいちゃん。あの世で元気だな。おれのところにもダジャレ、飛ばしてくれよな）  
「1が2、2が4、4が8、じいちゃん、バイバイ、バライ！」

れた。  
「うん。やつていく。母さんと。みんなと」  
ひとつ気になることがあった。  
「母さんとは、会えた？」  
「それがなあ まだなんだよ」

お寺での法要のあと、ハルタは水族館に行こうと母さんを誘つた。そこはじいちゃんがたおれた日に、ハルタが体験学習で来ていたところだ。水そうから陽気な音楽が聞こえてくる。ほかの人は聞こえてないみたいだけど。  
「あー」

じいちゃんだった。じいちゃんがマンボウの上に立って、おどっている。  
「へえ、マンボウって大きいのね」  
母さんはのんびりしている。まだじいちゃんが見えていないらしい。  
マンボウがゆつくりと、母さんの前に泳いできた。じいちゃんのおどりはげしくなる。  
すると、母さんの目がこれ以上はムリというくらい大きく開いて、口まで開いた。

### 審査員コメント

この作品からは、人々の「暮らし」が見えてきます。祖父が亡くなり、母と子の二人で生きていかねばならない日々を、友だちや近所のおばさん、先生など、周りの人たちが見守ってくれる展開に、読者は安心して励まされます。祖父のダジャレも実に効果的。

吉橋 通夫

## コウタリ リン

アルバイト 京都府

### 受賞のことば

だじゃれを考えすぎて頭の中が大渋滞。これは不真面目なこと?と考えもしました。でも、私たちは昆布に「よるこ(ん)ぶ」を見だし、マメ(健康)に暮らせるように豆を食べます。幸せを祈る言葉遊びは、心をこめたつくりごとだなあと思います。

受賞歴 第27回・第30回・第35回  
日産 雑誌と絵本のグランプリ 佳作  
第36回 日産 雑誌と絵本のグランプリ 優秀賞